

研究主題

児童相互の好ましい人間関係を育む学級づくり — 学級経営年間計画「絆つむぎプラン」の作成・活用を通して —

前橋市立細井小学校 新谷 奈津子

I 主題設定の理由

学級は児童にとって学習や学校生活の基盤であり、児童が集団の一員として安心して自分の力を発揮できることが不可欠である。次期小学校学習指導要領解説総則編では、「(学級担任は)学級経営の目標を設定し、指導の方向及び内容を学級経営案として整えるなど、学級経営の全体的な構想を立てるようになる必要がある」と学級担任の意図的・計画的な学級経営の充実が一層求められている。

本学級の児童(小学5年生、男子12名、女子13名)は、日頃の様子やQ-U調査から学級の雰囲気はよいと感じている児童が多いものの、前年度までの人間関係が固定化し、友人関係に広がりが見られなかった。また、学習意欲をもちつつも対人関係への不安から物事に消極的な児童と、積極的だが自己主張の強すぎる児童が混在していることも明らかになった。このような実態を受け、児童一人一人が自分の思いを伸び伸びと表現し、自信をもって様々な活動に取り組めるようになるためには、互いを理解し合い認め合える温かな人間関係のある学級づくりが必要だと考えた。

さらに、自らの学級経営を振り返ると、経験則による単発的な指導と、トラブル処理といった消極的な指導から、個や集団の成長をなかなか見取れないという課題が挙げられる。次期学習指導要領でも重要視されている学級経営の充実のためには、学級担任がビジョンをもち、意図的・計画的に児童相互の人間関係をつくるしかけが必要だと考える。

こうした児童の実態と自らの課題を踏まえ、

本研究では、「児童相互の好ましい人間関係の育成」をテーマに、学級経営年間計画「絆つむぎプラン」を作成・活用した学級経営を進めることとした。

プランの作成と活用を通して、児童は互いを理解し認め合える人間関係の中で、協力し合いながら、一人一人が自信をもって活動することができると考え本研究主題を設定した。

II 研究のねらい

児童相互の好ましい人間関係を育むために、児童の実態や年間計画に基づいた「絆つむぎプラン」を作成し、PDCAサイクルを取り入れながら意図的・計画的に活用することが有効であることを、実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

学級経営の中で、児童の実態や年間計画に基づき、意図的・計画的に人間関係を育てる指導をすれば、児童相互の好ましい人間関係が形成されるだろう。この見通しにせまるために、以下の三つの手立てを講じる。

- 1 「児童相互の好ましい人間関係を育む」視点で学級経営年間計画「絆つむぎプラン」を作成する。
- 2 児童相互の好ましい人間関係づくりの視点から、複数の教育活動を有機的に関連付けてプランを活用し、継続的に指導する。
- 3 PDCAサイクルを取り入れ、児童の育ちを見取り「絆つむぎプラン」を柔軟に改善し、指導する。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 児童相互の好ましい人間関係とは

「児童相互の好ましい人間関係」とは、互いを理解し合い、安心して自由に話すことができ、互いに支え合ったり高め合ったりできる信頼の絆で結ばれた温かな関係と考える。

こうした人間関係を目指すには、本学級の児童の実態から、以下の三つの人間関係を段階的に育てることが必要だと考えた。一つ目は「理解し合う関係」、二つ目は「認め合う関係」、三つ目は「互いのよさを活かし、協力し合う関係」である。これを本研究での人間関係づくりの重点とすることにした。

(2) 「絆つむぎプラン」とは

学級経営は、個や集団をより好ましい方向へと導く長期的な営みであり、担任の経営ビジョンを具体化したものが学級経営案である。「絆つむぎプラン」は、これをより細分化したものである。

「絆つむぎプラン」の作成は、①児童の実態の把握、②目指す児童像の設定、③学級経営目標の設定、④学級目標の設定と進めた。そして、児童相互の好ましい人間関係づくりに必要な要素を教育活動の中から抽出し、時期に応じた指導計画を立てた。プランの具体的な作成手順と留意点については、「V 実践の概要」で述べる。

(3) 複数の教育活動を有機的に関連付けた

プランの活用とは

「教育活動を有機的に関連付ける」とは、常時活動、道徳、学級活動、教科、総合など様々な教育活動を、ねらいや時期を合わせ、相互に影響し合うように関わらせていくことである。それにより、それぞれ単発で行うよりも効果的に人間関係を育てる指導が期待できると考える。

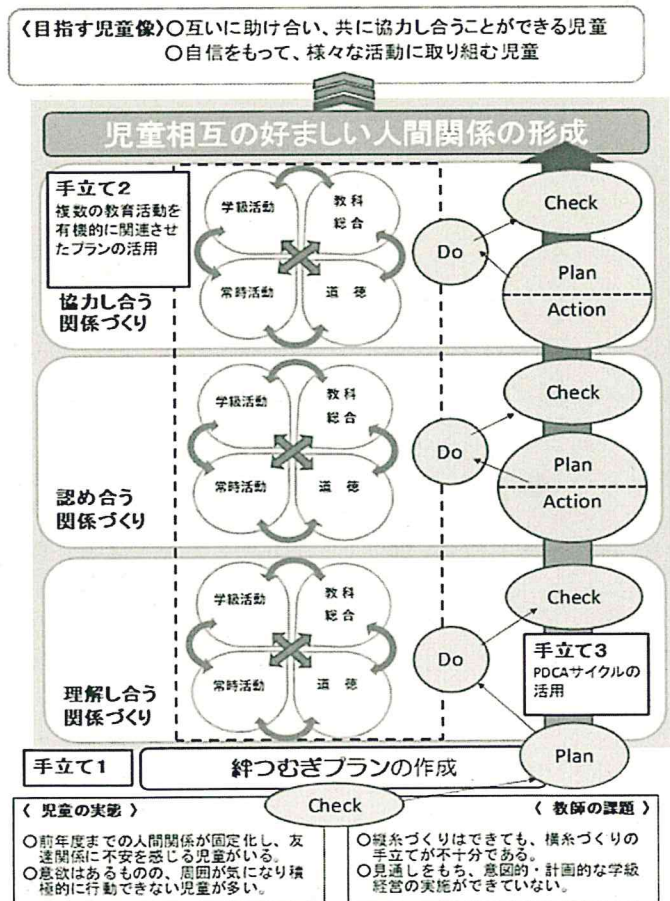
(4) PDCA サイクルを活用した児童の見取りと改善とは

プランを機能させていくために重要なのは、その時々々の個や集団の状態を見取り、プランを変えていく柔軟さであると考え。そこで、以下の二種類のPDCAサイクルを取り入れた。

一つ目は、担任が回すサイクルで、個と集団の育ちを把握し、指導の効果と課題から指導計画の改善を図る。児童の育ちの検証は、担任の経験則だけに頼ることがないようにするために、絆つむぎプランの「児童の育ちを見取るポイント」を指標にする。

二つ目は、児童と共に回すサイクルである。児童と担任が学級目標を共有し、児童が振り返りを行うことで、自分たちの成長や課題、その改善策を学級会で話し合い、次に繋げることを繰り返すことで、児童自身にも自分たちの成長を意識させることができるだろう。

2 研究の構想図



V 実践の概要のまとめ

1 手立て1【「絆つむぎプラン」の作成】

(1) 絆つむぎプランの基本的な考え方

本学級の年度当初の実態から、目指す児童像を「互いに助け合い、共に協力し合うことができる児童、自信をもって様々な活動に取り組む児童」とした。そして、目指す児童像を基に学級経営目標を「児童相互の好ましい人間関係の育成」とした。

更に、児童自身も自分たちの成長を意識することができるようにするために、学級目標づくりは、児童と共に行った。このとき、担任は、児童の意思を尊重しながら、目指す児童像にせまる学級目標になるよう配慮した。学級目標は、「助け合いいっぱい 友達いっぱい 絆を深める 5年2組」となった。

(2) 作成の手順と留意点

プランは、実践中もその時々状況に常確認できるよう1年間の計画を1枚の表にして作成することにした(別紙参照)。

まず、表の上段・横軸に人間関係が育つ過程を「児童相互の好ましい人間関係づくりの重点」として三つの段階(理解し合う関係づくり、認め合う関係づくり、協力し合う関係づくり)に分けて示した。その下に、それぞれの段階で目指したい児童の姿をなるべく具体的に挙げた。これが、指導していく中で教師が「児童の育ちを見取るポイント」となり、PDCA サイクルを回すための指標ともなる(表1)。

表1 人間関係が育つ過程の抜粋

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|---------------------|---|-----------------------|---|--|
| 児童相互の好ましい人間関係づくりの重点 | | 容観的データによるcheck Q-U | | ◎認め合う |
| | | ◎理解し合う人間関係づくり | | |
| 児童の育ちを見取るポイント | 肯定的に、相手の話をよく聞く。 友達の得意・不得意、好き嫌いが分かる。 誰とでもペアを組める。新たな友達をつくる。 | | | 友達のよさや頑張りを ペアや小グループで、 自分の意見を言えた上 |

次に、表の縦軸に、児童相互の人間関係を育てるための具体的な手立てを、主に三つの要素に分けて書き出した。

一つ目は、朝の会や休み時間など、常時活動で培われる「学級の雰囲気づくり」、二つ目は、道徳で培うよりよい人間関係を築いていこうとする「態度の育成」、そして三つ目は、児童が実際に関わ合いながら人間

表2 三つの要素の抜粋

| | | |
|--------|-------------------------|--|
| 雰囲気づくり | 週1レク | 教師が好ましい関わり方を共に遊ぶ楽しさを味わわ |
| | スマイルゲーム(朝活動) | 多様な友達とふれ合う楽しさ |
| 態度の育成 | 朝の会 朝の会 帰りの会 等 | <ul style="list-style-type: none"> 朝の会>1分間スピーチ(話し手への応援) 自己開示の広がり、ま 含意の時間> スマイルランチタイム |
| | 道徳 | <ul style="list-style-type: none"> 礼儀 友情 |
| 実践力の育成 | スマイル学級会(学級活動) | <ul style="list-style-type: none"> 話し合い 初の手出し 学級目標づくり |
| | 教科総合 | <ul style="list-style-type: none"> 安心して自己表現工夫 全体での発表の前の、ク ペアで丸付け、ペアで音 |
| | | 話の聞き方・多 |

関係をつくる力を伸ばしていく「実践力育成の場面」であり、これは学活、教科、総合などの場面で培っていけると考えた(表2)。

具体的には、人間関係づくりの視点から次のような活動を取り入れた(表3)。

表3 人間関係づくりで行った活動例

| | |
|------|--|
| 常時活動 | 週1レク…週1回休み時間にレク係が中心となり、クラスみんなで遊ぶ。 |
| | スマイルゲーム…構成的グループエンカウンターの実践 |
| | 朝・帰りの会…1分間スピーチ、今日のスマイルさん(友達のよさ見付け) |
| 道徳 | 主として他の人との関わりに関すること「礼儀」「親切」「友情」「尊敬感謝」など |
| 学活 | 学期ごとに、学級目標を振り返り成果と課題、改善策を話し合う。 クラスの課題を話し合い、みんなで解決を図る。 |
| 教科総合 | ペア学習、グループ学習、相互評価学習、ジグソー学習、問題解決学習 など |

特に常時活動では、本学級の児童の実態を踏まえ、多様な友達と意図的に触れ合わせる事ができる構成的グループエンカウンターを取り入れた。ここで、互いに触れ合う楽しさや共に遊ぶ楽しさを味わわせたところ、児童の中から、週1レクの提案があった。休み時間という自由な雰囲気の中で、児童が学級みんなで遊びたいと意欲をもったことから、人間関係のトラブルがあった場合も自分事として取り組めていけると考え、プランの中に取り入れることにした。

以上のようにして、プランを作成した。

2 手立て2

【有機的に関連させたプランの活用】

(1)実践の概要

児童相互の好ましい人間関係づくりの一つ目の段階「理解し合う人間関係づくり」において、4月から5月にかけての実践場面を取り上げる。

1学期、まだ児童の関係性が不安定な時、国語（二つの単元）・道徳・学活・常時活動の朝の1分間スピーチを関連付けて指導することにした(図1)。

「理解し合う人間関係づくり」のためには、互いのことを伝え合う場を意図的につくる必要がある。そこで、国語①「教えて あなたのこと」(光村図書)で友達へのインタビューをする実践で、友達の嗜好について知らないことが多いことに気付いたことから、朝の会で1分間スピーチを始めることにした。同時に、道徳で主題「こころのこもった礼儀」について考え、よりよい人間関係を築いていくための基本となる挨拶や感謝の言葉、礼儀の大切さに気付かせ、誰に対しても気持ちのよい接し方をしようとする意欲を高めた。

次に、1分間スピーチで友達に伝えることと同時に、相手の話を聞くことも欠かせないと考え、学級会で「みんなが意見を言えるクラスにしよう」について学級会を開いた。話し合いでは、児童から話の聞き方のルールをつ

くろうという意見が出され、それを基に五つのルールが決まった(図2)。

「安心できる話の聞き方」ルール

- ①相づちをうとう。
- ②話は最後まで聞こう。
- ③友達の発言に反応しよう。
- ④スマイル言葉を使おう。
- ⑤相手を責めない。

図2 安心できる話の聞き方ルール

このルールを、毎朝の1分間スピーチで実践していった。この時期の1分間スピーチでは、友達の話の内容をよく聞くために、聞き手がスピーチした友達に感想カードをプレゼントする活動も取り入れた(図3)。



図3 1分間スピーチの様子

そして、国語②「きいて きいて きいて みよう」で、再度友達にインタビューする時間を設けた。1分間スピーチで知った友達の好きなことや頑張っていることをより詳しく知るためのインタビューをすることで、友達の人柄にまで理解を広げることができた。

手立て2 「理解し合う人間関係づくり」での一例(4~5月)

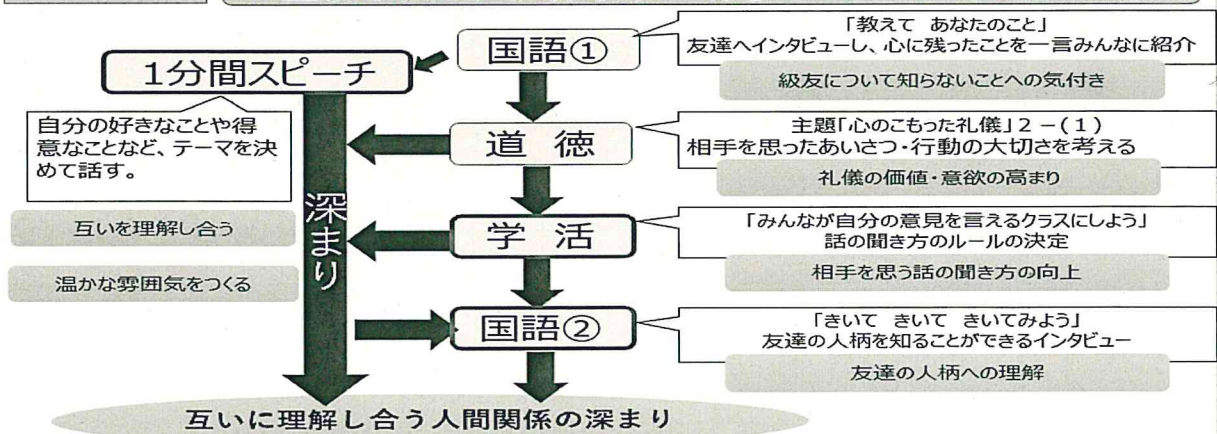


図1 有機的に関連させたプランの活用の一例

(2) 結果と考察

ここでは、特に意図的・計画的に関連付けた学級会と学級会後の1分間スピーチでの児童の姿を取り上げる。

学級会「みんなが意見を言えるクラスにしよう」の話合いでは、自分の考えを言えない理由を真剣に話し合うことができた。児童は、全体の前で発表することが苦手な友達に理由を聞いたり、互いの不安な気持ちを共有したりしていた。学級会の様子から、多くの児童が自分事として「安心できる話の聞き方」について考えていることが分かり、児童の関係性が不安定なこの時期に話し合ったことが有効であったと考えられる(図4)。



図4 意見交流の様子

学級会後、話の聞き方のルールを毎朝の1分間スピーチで実践した結果、次のような児童のやりとりが見られた(表4)。

表4 1分間スピーチの様子

| |
|---|
| A:少年野球で温泉に行きました。 温泉に入ってカラオケして、また温泉に入って、みんなでゲームして、また温泉に入って… |
| B:えー！そんなに温泉に入ったの？ (聞いている児童たちの笑い声) |
| A:うん。5回ぐらい入ったよ。 (聞いている児童から、歓声上がる) |
| — スピーチ終了後 — |
| C:(手を挙げて)カラオケは何歌ったんですか？ |
| D:私も聞きたかった。 |
| A:(笑顔で恥ずかしそうに)アムパーフェクトヒューマン (聞いている児童たちから「あー」という声) |



図5 1分間スピーチの様子

スピーチを聞いている児童からは、温かな笑い声が聞こえ、うなずいたり、感嘆の声をあげたりする姿がみられた。また質問をした児童は、身を乗り出して手を挙げ、スピーチした児童が自ら「C君」と指名し、照れながらも笑顔で質問に答えていた(図5)。

聞き方を大切にした1分間スピーチを継続したことで、児童からは、次のような気持ちも表れるようになった(表5)。

表5 スピーチをした児童の感想

- ・ みんなが「うんうん」とうなずいて聞いてくれると、ほっとして話しやすくなったので、自分も友達の話には反応しようと思う。
- ・ 途中で話がとまっちゃったとき「大丈夫だよ」って言ってもらえたから、頑張って話すことができた。

児童は相づちをうったり、上手くスピーチできなくて不安な友達を励ましたりすることが自然とできるようになり、話の聞き方のルールが児童の生きた力となって、聞き上手な学級に変容していったと考察できる。聞き上手な児童が増えることで、スピーチする児童も、更に安心して自分を表現できるようになった。4月は1分間話せなかった児童も、笑顔で1分間話せるようになった。学級に児童が話しやすい温かな雰囲気形成されてきたことが分かる。

以上のことから、複数の教育活動を関連付けて継続的に指導することが、児童が互いを理解し合う人間関係の形成に効果的であったと考えられる。

3 手立て3

【PDCA サイクルを取り入れたプランの実践】

(1)実践の概要

児童相互の好ましい人間関係づくりの二つ目の段階「認め合う人間関係づくり」において、9月下旬から11月にかけての実践場面を取り上げる。

学級が、安心して自己表現ができる場所になったことで、自己主張できるようになった児童は、互いの意見がぶつかるようになり、担任として「折り合いをつけられるようになって欲しい」と考えた。一方で児童は、2学期始めの学活「学級目標の振り返り」で、「週1レクでのけんかを減らし、協力できるようになりたい」という願いをもった。

そこで、「絆つむぎプラン」作成当初は予定していなかった国語の単元「意見が対立したときは」を人間関係づくりに活用し、よりよい話し合いの仕方について学び、学級会や教科などで実践させた。これが、担任が児童の実態からプランを見直した点であり、担任が回すPDCAサイクルである(図5)。

また、プラン作成時は、学年行事への取組を通して人間関係づくりを進めていこうと考えていたが、児童がその時に抱えていた課題意識を受けて、教師は次の手立てを学級会「音

楽会を成功させよう」から、週1レクの拡大版「スマリンピックを成功させよう」に変更した。これが、児童と共に回すPDCAサイクルである。

国語「意見が対立したときは」では、よりよい話し合いの仕方について、新たに「意見に反対しても、友達は否定しない」というルールが加わった(図6)。

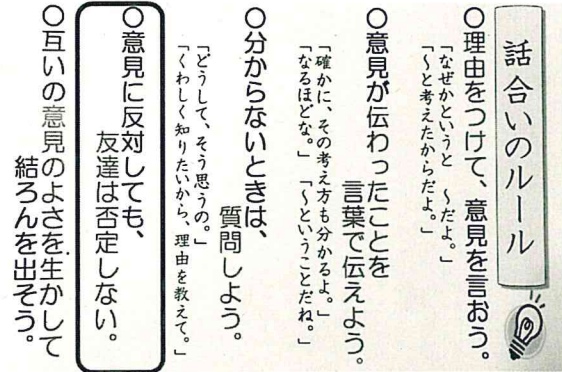


図6 話し合いのルールの実践

意見の対立があっても、自分の意見がダメだと思ふ必要はない、意見の対立を恐れるのではなく、相手を尊重しながら意見を出し合っていこうということを意識させた。

学級会「スマリンピック (拡大クラスレク) を成功させよう」では、新たに決まった話し合いのルールを意識させながら話し合うよう促した。学級会では、最終的に「けいどろ」と「脱出ゲーム」を合わせたオリジナルのゲーム

に決定した。その後、11月のスマリンピックに向けて、児童が自分たちで役割分担をして、休み時間や放課後に準備を進め、スマリンピックの司会進行から、振り返りまで行った。

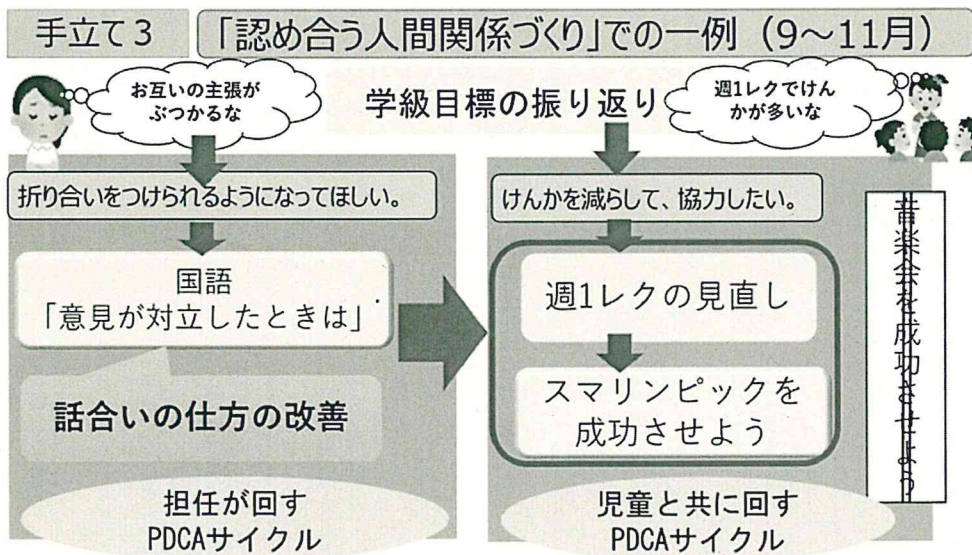


図5 PDCAサイクルを活用したプランの実践の一例

(2) 結果と考察

学級会「スマリンピックを成功させよう」では、「クラスみんなが協力して、全員が楽しめるゲームを決めよう」というめあてのもと、話し合いが行われた。話し合いでは、「けいどろはみんな好きだけれど、つかまった人がつまらない」「足が遅いと仲間を助けられない」という心配な点と、テレビで見る「脱出ゲームに挑戦したいけれど、ゼロから作るのは難しい」という意見が出て、けいどろと脱出ゲームを組み合わせた「どろぼうは、けいさつが作ったクイズに答えられたら、タッチされなくても逃げられる」というオリジナルのゲームに決まった(図7)。

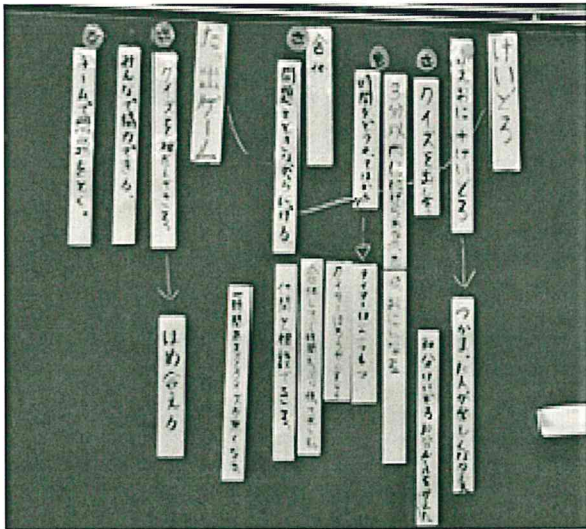


図7 学級会の板書

ここでは、二択の発想に縛られず、みんなが協力できて楽しめるという視点で考え、互いの意見を受け容れながら、一つのゲームを作り上げていく児童の姿が見られ、新たに追加した話し合いのルールが有効であったと考えられる。

また話し合いの中で、質問に対して上手く答えられないで困っている友達を、近くの児童が助けたり励ましたりする様子が各所で見られた(図8)。学級会の振り返りでは、「私が発表すると、『いいね』や『ああ』など、嬉しい反応をしてくれるので、心がほっとします。」など、友達から受け容れられたことへの安心

感や喜び、助けてもらったことへの感謝の記述が多くあった。



図8 全体での話し合いの様子

スマリンピック当日は、自分たちで作ったゲームだったため、ルールが曖昧で警察役に不利であるという問題が起きた。しかし、担任に助けを求めず、クラス全員で集まって話し合いを始め、新たなルールを加えるという改善策をみんなで決めることができた(図9)。

自分たちで作ったゲームだったため、問題発生

どろぼうが、クイズゾーンを安全な場所にしちゃってるから、つかまえられないよ。

先生は、俺たちにまかせせるんだから!

先生どうしますか?

そっか、そっか。

逃走者のみなさんに相談です。

図9 スマリンピック当日の様子

振り返りでは、友達に助けてもらった嬉しさや、みんなで相談して自分たちで協力してやりきれたことへの、達成感・成就感を多くの児童が感じたことが分かった(次頁表6)。

この実践で、学級活動全体を通して、児童はお互いの意見の違いを受け容れたり、友達のアイデアのよさに共感したりしながら、認め合えるようになった。さらに、問題が起こった時は、自分たちで解決しようと集まり

話し合うなど、次の段階の「協力し合う人間関係」も育まれた様子も見られた。

表6 振り返りでの児童の感想

・どろぼうの時、何回もつかまったけど、全部仲間が助けに来てくれて、嬉しかったです。
・全部自分たちだけで作り、相談し、楽しみながら準備したので、私の心は、心臓が出るくらい楽しかったです。
・トラブルもあったけど、それもふくめて楽しかったです。改善策もみんなで考えられたし、協力できて、自分たちだけでできるんだなと感じました。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

12月のQ-U調査の結果、学級満足群の児童が増え、学級の雰囲気・学習意欲共に高くなり、学級集団としての凝集性が高まったことが分かる(図10)。担任の指示や賞賛がなくても、互いに助け合い学級に貢献しようとする児童の姿が見られるようになった。これは、児童にとって好ましい人間関係が形成されてきていることの表れと考える。

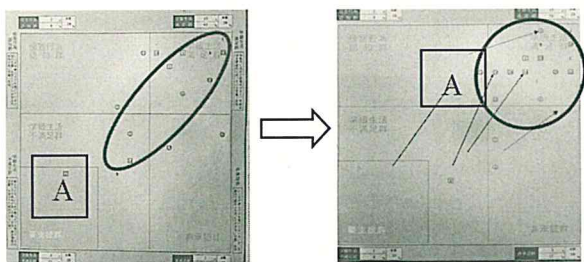


図10 Q-U調査(1学期→2学期)

個別に見ると、1学期に学級不満足群(要支援)にいた児童Aにも変化が見られた。Aは、2学期の帰りの会での友達のよさ見付け「今日のスマイルさん」で、自分の係ではない仕事を手伝ったことや、苦手なリコーダーの練習を頑張って音楽のテストに合格したことを多くの友達から賞賛されたことから、自分に自信をもつようになってきた。Aの日記には、友達に認められた喜びや、応援への感謝の気持ちが書かれていた。

本研究の成果をまとめると、以下のように

なる。

- プランを作成することで、経験則だけに頼らず、意図的・計画的な学級経営に取り組むことができた。そして、トラブルに対処する指導から、人間関係を積極的に育てる指導へと転換できた。
- 「道徳で価値に気づき、学活で具体的な行動のあり方を学び、それを、時期を合わせて常時活動や授業で実践する」という教育活動の有機的な関連付けは、児童の思考をスムーズにしたり、意欲を高めたりすることにつながり、好ましい人間関係の形成に有効であった。
- PDCAサイクルを取り入れ、学級の実態や児童の意識に応じた手立てを講じ、取り組ませたことにより、児童は自分事として活動に取り組み、好ましい人間関係を築くことができた。

2 今後の課題

- 本研究では、「児童相互の好ましい人間関係の育成」をテーマに、学級経営年間計画「絆つむぎプラン」を作成・活用した学級経営を進めたが、今後は、その他の課題についても、学級経営年間計画の作成と活用が有効であることを検証していきたい。

〈参考文献〉

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説総編』東洋館出版社(2008)
- ・文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター『特別活動指導資料 楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編』文溪堂(2014)
- ・河村茂雄『学級集団づくりのゼロ段階 学級経営力を高めるQ-U式学級集団づくり入門』図書文化社(2012)
- ・岩手県立総合教育センター『学級経営プログラム』(2005)